



■ 西トップ遺跡の保存と修復

西トップ遺跡の概要

西トップ遺跡はアンコール遺跡の中心、アンコール・トムの中にあります。奈良文化財研究所は、2002年より継続して西トップ遺跡の調査をおこなっています。9世紀末～10世紀に遡る前身造構の存在も推定されますが、今見る南・中央・北の3祠堂は14世紀以降に造営されたことが、発掘調査等でわかっています。

南祠堂の解体修復

2008年5月、中央祠堂の上部40石余りが転落し、急遽、解体修理をおこなうことになりました。2012年3月に南祠堂の解体から修復事業に着手しました。

南祠堂は上部の軸部、それを支える上成と下成の基壇部より構成され、下成基壇は砂岩の外装の内側に、砂を版築で固めた基壇土があります。しかし、南祠堂は砂岩の外装の隙間から基壇土が流れ出したことによって、全体が傾いてしまっていました。解体・再構築によって傾きを直し、基壇土が流出しないように版築をやり直すことになりました。

軸部は10段、上成基壇は7段、下成基壇は8段の石材で構成されることがわかり、各段ごとに石材に番号を振り、解体を進めました。一旦解体した石材は一堂に並べ、写真撮影・実測・保存状況の調査をしました。その後、仮組をおこない石材相互の組み合せを確認してよいよ再構築です。現在下か



南祠堂再構築状況

ら3段目の砂岩の再構築を進めしており、今年度末にはよみがえった南祠堂を見る事ができるよう、現地作業員とともに、鋭意作業を進めています(写真左)。

調査修復の意義と成果

今回の修復にあたっては、解体と同時に縦密な調査をおこない、遺跡の歴史を再構成することも目的としました。調査修復と呼んでいます。各石列の解体に際しては発掘調査を併行しておこない、多くの成果を得ることができました。

まず、基壇内からは青銅製鈴やベトナム陶磁をはじめとする遺物が出土し、南祠堂の14世紀代の造営をあきらかにできました。さらに、基壇南外側からは3基の埋納土器が発見されました。現代の地鎮祭のような儀式がおこなわれたのでしょうか。

思いがけない発見もありました。その一つは、基壇の下の方から石列が発見されたことです(写真右)。基壇の中に十字に平たい石を並べるとともに、さらに区画を区切った石列もありました。版築をするときの土留めかと考えました。しかし、部分的に区切ってない等、謎の多い石列です。

今回の最大の発見は、中央祠堂南階段の発見です。階段は南祠堂の下成基壇敷石によって覆われており、この発見によって、中央祠堂が先に造られ、後から南祠堂が付け足されたということがはっきりしました。

今後、こうした調査をおこないながら、南祠堂を組み上げ、北祠堂の解体へと向かう予定です。

(企画調整部 杉山 洋、佐藤 由似)



基壇内石列と中央祠堂南階段



発掘調査の概要

藤原宮東方官衙北地区の調査(飛鳥藤原第183次)

藤原宮では、内裏・大極殿院・朝堂院といった中枢部の東西に、現在の中央官庁にあたる官衙区画が展開していたと考えられています。近年、奈良文化財研究所は大極殿院・朝堂院の調査を継続して実施しています。2014年は、さらに、官衙地区の実態解明を目的とした発掘調査もあわせておこないました。調査地は大極殿の東およそ250m、東方官衙北地区と呼称する地区の南西部、内裏に隣接する内裏東官衙の東隣です。調査期間は2014年10月1日から12月25日までで、調査面積は973m²です。

調査の結果、古墳時代以前から藤原宮期まで、大別4時期にわたる遺構変遷を確認しました。特筆すべき成果として、藤原宮期では東西に並ぶ2棟の大規模建物を検出しました。そのうちの1棟は調査区の東端に建つ桁行4間・梁行3間の縄柱の礎石建物です。2012年の調査でこの建物の一部を検出していましたが、今回その全容をあきらかにできました。もう一つの大きな発見は、調査区の西端に建つ床張りの大型掘立柱建物で、一辺2m近い柱穴からなり、規模は桁行5間以上・梁行2間です。これらの建物は、他の官衙地区の建物のように区画塀に囲まれていません。礎石建物と大型掘立柱建物は、南北中軸がほぼ揃い、この2棟を結ぶ東西線が藤原宮大極殿



調査区全景(西から)

院の中心を通るという位置関係になることから、藤原宮造営当初から計画的に配置された重要な建物であったとみてよいでしょう。

礎石建物には建て替えた形跡はなく、藤原宮期を通して存在したようです。大型掘立柱建物は内裏東官衙の官衙区画塀より古いことがわかりましたが、その規模や構造からみて藤原宮期以前の建物とは考えにくいものです。おそらく、この大型掘立柱建物は藤原宮前半期に存在し、後半期に取り壊されて、その場所に内裏東官衙区画が増設されたのではないかでしょうか。

礎石建物は総柱であることから高床の倉庫や楼閣のような建物等が想定できますが、その性格の説明は将来の課題です。ただし、これらの大型建物は配置や規模の大きさからみて、大小の区画の中に整然と並ぶ既知の官衙建物とは異なる特殊な性格をもつものであったことが推測でき、藤原宮の構造を考える上で非常に重要な発見であることは間違いないかもしれません。調査では、このほかに藤原宮造営直前や造営期の条坊道路や建物も検出し、多くの成果があがりました。

現地見学会は衆議院議員総選挙や奈良マラソンと日程が重なったばかりか、雪がちらつく酷寒の一日となりました。それにもかかわらず足をお運びいただいた622名の皆さんのお意には、本当に寒さも忘れる思いでした。(都城発掘調査部 森先一貴)



礎石建物(東から)

興福寺西室・北円堂の調査(平城第540次)

興福寺では、境内整備とともに1998年から発掘調査を進めています。今回は、西僧房「西室」の大房とそれに並列する小字房の北端部の調査、および北円堂周囲の調査をおこないました。ここでは紙幅の都合から西室の調査について述べます。

西室は、昨年度にその南半部の発掘調査を実施しています(平城第516次調査)。それによると、現存する大房の礎石のほとんどが創建当初の位置を保っていること、建物から基壇の端までの距離は、南面で2.1m、東面で2.2mと考えられること、大房の西に掘立柱建物が並立していたことがわかつています。掘立柱建物を小字房と想定すると、大房との距離が約2.5mと近接し、並存した場合に軒がぶつかることや絵画資料と様子が異なることから、この建物を小字房とするには問題を残しています。

今回の調査では、この西室大房の基壇規模確定と、小字房の様相把握を主な目的としました。調査の結果、西室北辺の様相は、次の3時期に区分できることがわかりました。すなわち、西室創建期から掘立柱建物廃絶までの1期(奈良~平安時代)、掘立柱建物廃絶後から西室大房廃絶までの2期(鎌倉時代から江戸時代前期)、西室廃絶後の3期(江戸時代前期以降)です。

1期は、西室大房と掘立柱建物が併存していた時期です。大房では、南半部と同様に現存するほとんどの礎石が、創建時の位置を保っていることを確認しました。礎石は、後世に据えかえられた1石のみが花崗岩であるほかは、すべて安山岩の自然石です。大房の建物規模は、南半部の調査をあわせると、南北62.7m、東西約11.8m、桁行10間、梁行4間に復元できます。また、北面の基壇外装(地覆石や羽目石)を確認しました。基壇外装の石材は、すべて奈良と大阪の境にある二上山で産出する凝灰岩です。地覆石は、北端の礎石から1.8m(6尺)の位置に据えられています。基壇の南北規模は66.5m(約225尺)と確定しました。基壇西辺が数条の南北溝によって後世に改変されており、東西規模は確定できませんでした。このほか、大房の西側に並列する掘立柱建物も確認できました。調査区内では、後世の造構により、東側の柱筋しか残っていませんでしたが、南半部の状況を加味すると、掘立柱建物の規模は、桁行10間、梁行2間と推定で

きます。続く2期には、この掘立柱建物がなくなり、その跡地に円形土坑等が掘られます。円形土坑は直径1.2m、深さは約2.5mあり井戸の可能性もありますが、現在は水が湧きません。埋め土からは大量の土器が出土しており、最終的には土器の廃棄穴として利用したのでしょうか。そのほかに廃棄穴は10基以上あります。何度もこの辺りを掘って、不要な土器や瓦を捨てたと考えられます。そして、3期は大房の建物廃絶後、カマドや埋葬、方形土坑等の施設が造られる時期です。カマドは上部の形がわかりませんが、火を焼いたたたきや壁の一部が残っていました。方形土坑は4基あり、一辺1.8~2.6mのはば正方形で、深さは30~80cm、半地下式の施設と考えられます。このうち1基は、大量の土器を地面に敷いたのち、その上に白色粘土を貼って床としています。性格は検討中ですが、何らかの貯蔵施設の可能性があります。

西室大房の基壇規模をほぼ確定できましたが、懸案の小字房に関しては、掘立柱建物がそれにあたるかどうか、やはり断言できません。しかし、西室北辺の土地利用の変遷があきらかになりました。特に近世のカマドや方形土坑等の施設群は、近世の興福寺の様子を知る上で、重要な成果といえるでしょう。

(都城発掘調査部 芝 康次郎)



西室北端部全景(西から 奥に大房の礎石がみえる)

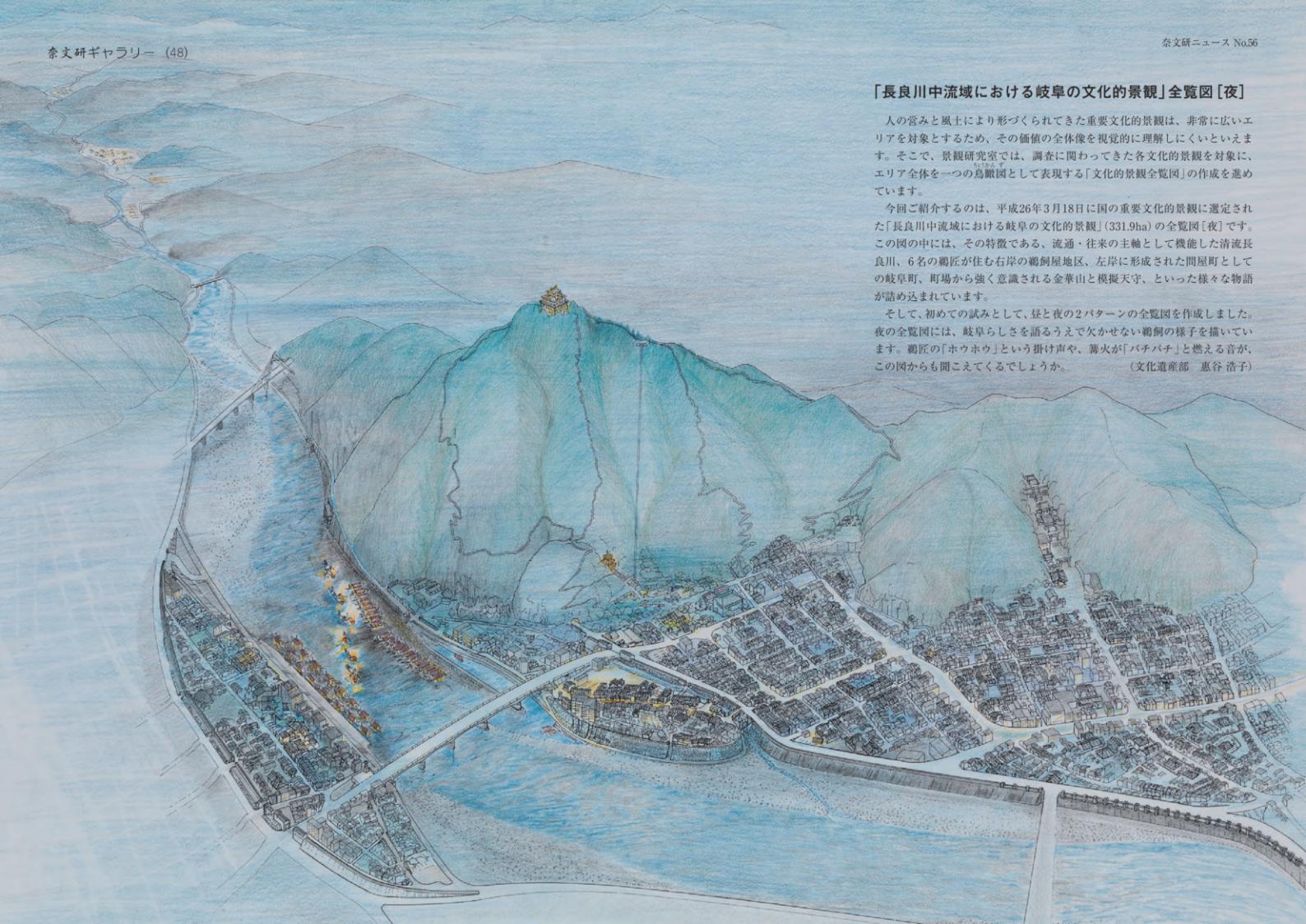
「長良川中流域における岐阜の文化的景観」全観図【夜】

人の営みと風土により形づくられてきた重要文化的景観は、非常に広いエリアを対象とするため、その価値の全体像を視覚的に理解しにくいといえます。そこで、景観研究室では、調査に関わってきた各文化的景観を対象に、エリア全体を一つの鳥瞰図として表現する「文化的景観全観図」の作成を進めています。

今回ご紹介するのは、平成26年3月18日に国の重要文化的景観に選定された「長良川中流域における岐阜の文化的景観」(331.9ha)の全観図【夜】です。この図の中には、その特徴である、流通・往来の主軸として機能した清流長良川、6名の郷土が住む右岸の郷土屋地区、左岸に形成された問屋町としての岐阜町、町場から強く意識される金華山と模擬天守、といった様々な物語が詰め込まれています。

そして、初めての試みとして、昼と夜の2パターンの全観図を作成しました。夜の全観図には、岐阜らしさを語るうえで欠かせない郷土の様子を描いています。郷土の「ホウホウ」という掛け声や、篝火が「バチバチ」と燃える音が、この図からも聞こえてくるでしょうか。

(文化遺産部 恵谷 浩子)





韓日発掘交流に参加して

奈良文化財研究所との研究交流の一環として、2014年9月16日から11月7日まで奈文研に滞在し、藤原宮跡と平城京興福寺の発掘調査に参加しました。

藤原宮跡の発掘調査は大極殿南側の内庭でおこなわれ、調査の結果、建物、運河、先行条坊道路、古墳等が確認されました。奈文研では、韓国国立慶州文化財研究所と異なり、発掘の面積を小規模に分けて調査をおこなっており、また、考古学や建築史学、文献史学等の様々な専攻の研究員が一つのチームになって、遺構や遺物について多角的に検討をおこなっている点が、建築を専攻する者として漠然と感じました。

続いて参加した興福寺の発掘調査は、伽藍整備と防災施設建設のための事前調査が並行しておこなわれていました。今回の発掘調査は西室や北円堂、五重塔周辺で進められ、北円堂では回廊と推定される基壇の痕跡と近世以降と推定される土坑や瓦溜りが確認されました。五重塔の調査では明治時代と推定される土管が完全な状態で確認されました。

このほかに薬師寺東塔修理・発掘現場、三河国分尼寺整備状況、足助の歴史的な町並み、博物館明治村の見学や奈文研のGIS(地理情報システム)や遺跡整備を専門とする研究員との懇談等を通じて、日本の過去・現在・未来の文化財の整備方法について、多くのことを学ぶことができ、非常に意義深い交流となりました。

国立慶州文化財研究所と奈文研の韓日発掘交流は来年で10年になります。今後も両国の研究所がさらに良好な関係を維持し、研究者間の学術交流がより一層深まることを期待しています。

(国立慶州文化財研究所 金 東烈、翻訳 謙早 直人)



興福寺での測量風景(左奥が筆者)



遺跡整備に関する研究集会

遺跡整備研究室では、これまで遺跡整備の実務に携わる行政担当者・研究者等を対象とする研究集会を実施してきました。今年度は、2015年1月16日に開催し、参加者は85名でした。

遺跡の環境整備事業は、昭和40年代から始まり、その当初に整備された遺跡では、経年により施設の劣化・陳腐化が進んだり、遺構の保存上の問題が生じたりして、再整備を実施・計画している事例が増えています。そこで、今年度の研究集会では、「史跡等の整備・活用の長期的な展開—経年によるソフト・ハードの変化と再生—」をテーマとし、前半に、長期に渡り整備を実施している3つの遺跡(登呂遺跡、一乘谷朝倉氏遺跡、西都原古墳群)の担当者から、整備事業のこれまでと現状を発表いただきました。後半には、遺跡整備とは異なる分野の3名の方から博物館、都市公園、動植物園(江戸東京たてもの園、東京都美術館、東山動植物園)の再生について発表いただき、各分野でも遺跡整備と共に課題を抱えながら再生事業に取り組んでいることを確認しました。その後の総合討議では、基本方針等の見直し、事業効果の把握・評価、社会的ニーズの変化への対応、施設の老朽化・展示の陳腐化に対する対策、運営体制における協働・連携の重要性等について議論しました。

参加者からは、「市民に求められているものは遺跡も同じで、先行して取り組んでいる異分野の事例や考え方は参考になった」との感想をいただきました。これからも遺跡整備特有の問題に取り組みつつ、広い視野で調査研究を続けていきたいと思います。

(文化遺産部 高橋 知奈津)



総合討議の様子

 「学術情報リポジトリ」による
研究成果の発信

奈良文化財研究所では、研究成果の社会的還元のため、過去の刊行物をインターネット上で電子公開しています。コンテンツは、紀要(年報)・概要・学報・史料・発掘調査出土木簡概報・飛鳥資料館図録・現地説明会資料・展示解説資料・奈文研ニュース等です。各コンテンツには、それぞれOCR(光学文字認識)処理を施しているため、任意のキーワードで全文検索できます。そのため自分の興味がある論文に容易にたどり着くことが可能です。

2015年1月現在、論文(記事)単位で1,894件公開しています。電子公開には、図版類の許諾確認が必要であり、確認を進めつつ、権利関係をクリアしたコンテンツから順次公開しています。

人気のあるコンテンツは、現地説明会資料や展示解説資料等です。これらの資料は性質上、冊子体になっておらずパンフレット形式であるため、全国の図書館には配本されません。現地説明会や展示場所以外では入手できないため、電子公開は、貴重なコンテンツ提供の場所となっています。

2015年1月には、国立情報学研究所が提供しているNII学術情報データベースCINiiとデータ連携を開始しました。これによりCINiiで検索した論文を奈文研のリポジトリにて本文を電子閲覧することが可能となり、成果提供の機会が増え、利便性が向上しました。

利用者の方々にはたいへん好評で、アクセス件数は増加基調です。一度、「学術情報リポジトリ」にアクセスいただき、研究成果をぜひご活用ください。

(研究支援推進部 高田祐一)



学術情報リポジトリ トップページ
(<http://repository.nabunken.go.jp/>)

第18回古代官衙・
集落研究集会の開催

奈良文化財研究所では、古代官衙と集落に関する研究集会を毎年開催しています。本研究集会は、律令国家を象徴する都城とその対極にある集落、その両者を結ぶ地方官衙の有機的な関係をあきらかにすることを目的としています。1996年に第1回研究集会を開催し、現在にいたっています。

2014年12月12・13日に第18回研究集会を開催しました。今回は「宮都・官衙と土器」をテーマとし、7名の報告者による研究発表と総合討論をおこないました。参加者は148名でした。

総合討論では玉田芳英(都城発掘調査部副部長)の司会のもと、都城・官衙遺跡から出土する土器の特徴とその歴史的背景について議論が交わされました。また、各報告者が扱った地域以外の研究状況についても多数の参加者からの発言があり、活発な討論となりました。これらの成果は来年度、研究報告として刊行する予定です。

本研究集会は、考古学・文献史学・建築史学・歴史地理学等、諸分野の研究者が一堂に会し、律令国家を構成する様々な遺跡、遺構、遺物の中から毎年一つのテーマを取り上げ、様々な角度から掘り下げていく学際的な研究集会である点に特色があります。都城を主なフィールドとする私たちにとっても、遺跡から古代国家をあきらかにしようとする共通の問題意識を持った方々と議論を交わすることは、大変勉強になります。今後とも古代官衙・集落研究会の活動にご注目ください。

(都城發掘調査部 小田 篤樹)



発表の様子

奈良文化財研究所飛鳥資料館開館40周年記念 平成27年度 飛鳥資料館春期特別展「はじまりの御仏たち」

飛鳥時代は仏教文化が開花し、多くの仏像が造られた時代でした。各地の寺院に伝わる仏像や仏画以外にも、遺跡から出土する金銅仏・押出仏・塑像・塼仏等があり、それぞれ個性的な御仏のすがたが表されています。

本展覧会では、出土品を中心に飛鳥時代の御仏のすがたを広く紹介します。特に考古学的な観点から、各種の仏像の製作と使われ方、また、寺院における莊嚴にも迫ります。魅惑的な「飛鳥の御仏の世界」をご覧いただけましたら幸いです。

(飛鳥資料館 丹羽 崇史)



会 期：2015年4月24日（金）～6月21日（日） 会期中無休

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）

講演会：5月9日（土）14:00

大脇 肇氏（奈文研名譽研究員・元近畿大学教授）

「『傳仏学研究最前線』奉獻から莊嚴・三尊から群像へ—」

ギャラリートーク：4月25日（土）、5月9日（土）、6月14日（日）各日10:30～、14:00～

※5月9日は10:30～のみ 研究員が展示を解説します。

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/asuka/> お問合せ：☎0744-54-3561（飛鳥資料館）

oo

平城宮跡資料館 展示紹介「平城宮跡の歴史と保存」

資料館のガイダンスコーナーでは、平城宮跡の歴史や、発掘調査から復原整備への過程を年表と模型で紹介しています。年表は、都の前史からはじまり、奈良時代の主な出来事や、宮跡の研究と保存運動の現代にいたるまでの流れを取り上げています。模型は、平城京から長岡京への「遷都」、平城宮跡の「発掘」、正確な記録を後世に残す「実測」、遺跡公園として活用する「整備」の様子を立体的に示しています。

延暦3年（784）の長岡京への遷都により、宮跡は1,000年以上にわたり田畠となり、華やかな都の面影はなくなりました。しかし、江戸時代末期、古市奉行所（現・奈良市）に勤めた北浦定政により測量がなされ、初めて平城宮・京が學問的に研究されました。近代以降、建築史家の関野貞らにより研究は進み、地元の植木職人・棚田嘉十郎らの保存活動も契機となり、現在も宮跡の発掘、実測、整備が続いている。

年表や模型から、平城宮・京への先人たちの熱い思いが受け継がれ、平城宮跡がいまこの地に守り伝えられているということを読み取っていただけたら幸いです。

（企画調整部 中村 玲）

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで、月曜休館）

ホームページ：<http://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/> お問合せ：☎0742-30-6753（連携推進課）



■ お知らせ

飛鳥資料館春期特別展

2015年4月24日（金）～6月21日（日）

「はじまりの御仏たち」

■ 記録

文化財担当者研修

○文化財写真課程

2015年1月13日～23日

13名

○出土文字資料調査課程

2015年1月26日～30日

6名

○保存科学Ⅲ（応急処置）課程

2015年2月16日～20日

12名

平城宮跡資料館ミニ展示

（第1期）2014年12月6日（土）～2015年2月1日（日）

「発掘報展 平城2014」

9,806名

飛鳥資料館冬期企画展

2015年1月16日（土）～3月1日（日）

「飛鳥の考古学2014—繩文・弥生・古墳から飛鳥へ—」

2,658名

現地説明会等

○国宝薬師寺東塔保存修理事業にともなう発掘調査

2015年2月28日

1,599名

■ 最近の本

○「長舎と官衙の建物配置 報告編」

「長舎と官衙の建物配置 資料編」

㈱クバプロ 2014年12月

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp/>

Eメール jimu@nabunken.go.jp

発行年月 2015年3月